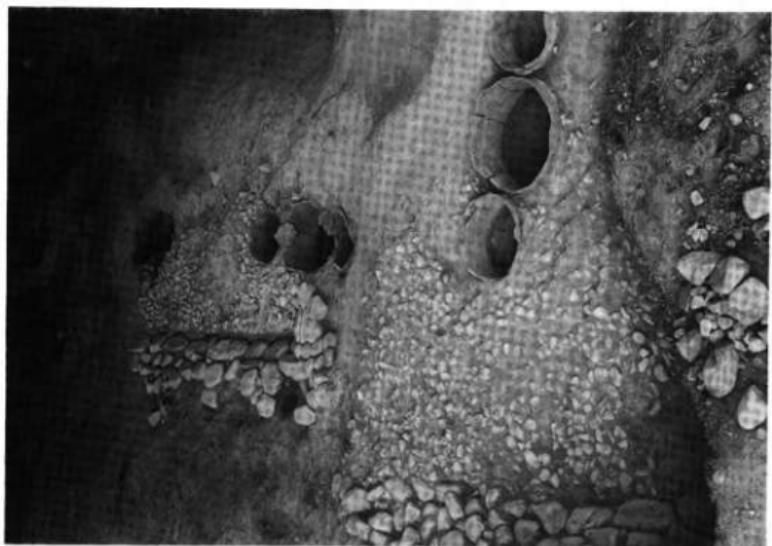




第27図 第6グリッド 前方部より



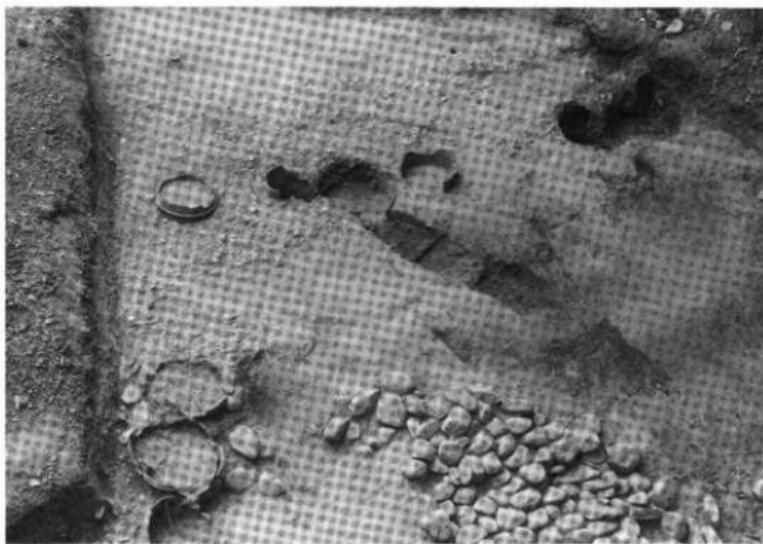
第28図 第6グリッド 後円部より



第29図 第5グリッド 蓋石・埴輪列



第30図 第5グリッド 1段目テラス蓋石・埴輪列



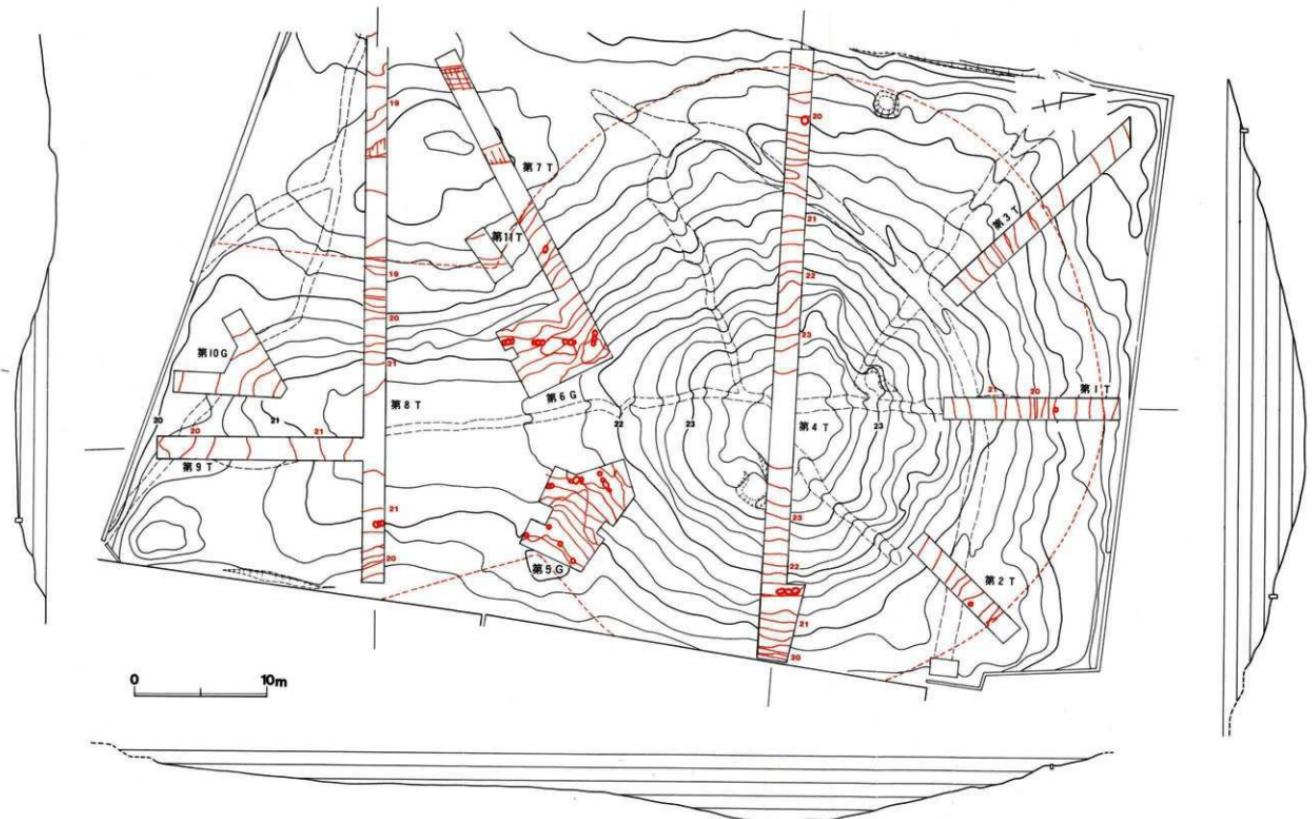
第31図 第5グリッド 2段目テラス埴輪列



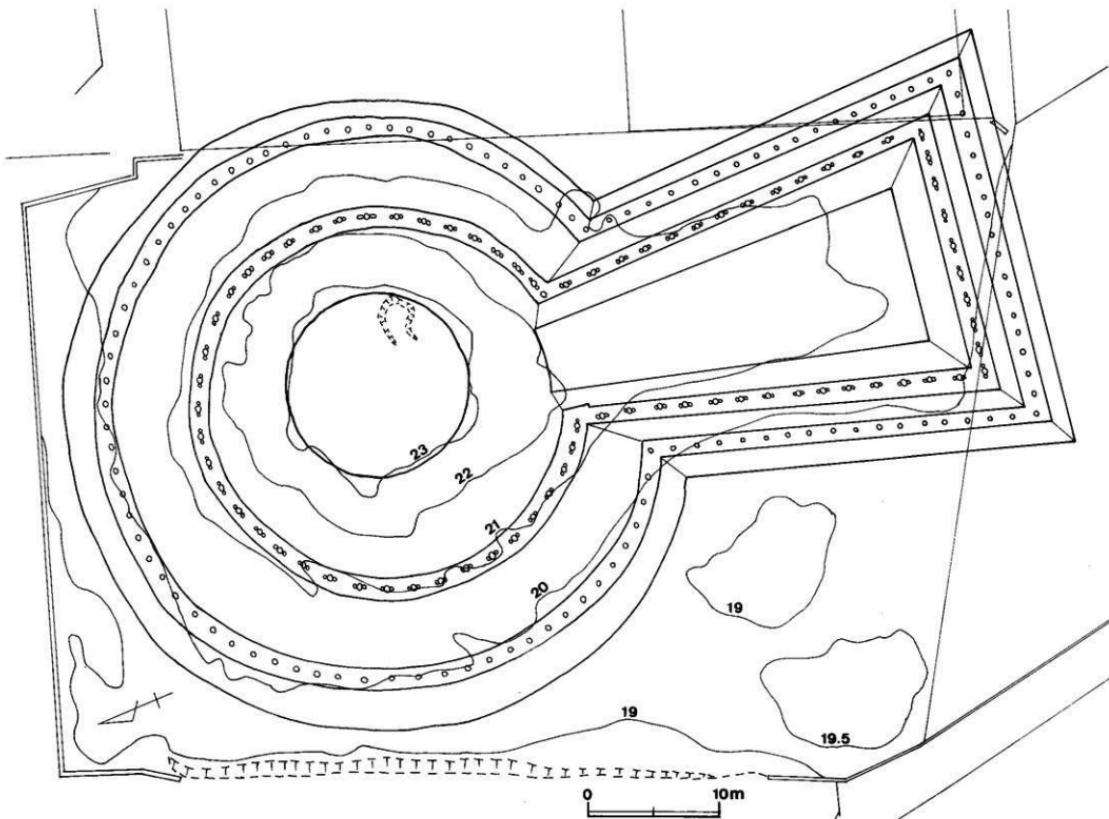
第32図 第8トレンチ 西側（前方部）

調査の結果、確認したことを簡単にまとめてみます。

- 墳丘築造の際、地山の利用は第2トレンチ1段目テラスで確認したのみで、他のトレンチでは基底面だけでした。
- 西側くびれ部2段目テラスで後円部より前方部に移行する際に約40cmの段差をもって接続します。東部くびれ部においてはスムーズに移行するのに西側のみこのようになることは、東高西低という地形的な制約によりながら後円部側で両くびれ部の高さを意識して等しくしたために、前方部との高低差を調整しなければならない結果になったと考えられます。
- 莼石は1段目斜面が全体的に小さい河原石を用いています。基底の基石列は検出できませんでした。2段目斜面は基石列に大きい石を横方向に整然と並べ、上方はそれよりも小さい石を用いています。
- 第3トレンチ1段目斜面において河原石の代わりに板石を用いています。別に板石を用いなければならない理由は考えられないのに用いていると言うことは、他所の構築で使用した残りの石材を利用したことが考えられます。したがって、埋葬主体に用いられている可能性があり、竪穴式石室を連想させます。
- 墳輪は1段目テラス面で径38cm内外の円筒形埴輪を約1.5mの間隔で配置しています。2段目テラス面においては3本一組という特異なもので、中央のものが大きく両側が小さい円筒形埴輪で、そのうちでも中央のものは朝顔形埴輪になるものと考えられます。また第4トレンチ東側2段目テラス面で検出した楕円形埴輪は何組目に配置されているのかは不明です。配置の間隔は約1m内外です。
- 第7トレンチで検出した墳丘外側の濠状遺構は第8トレンチで検出した空堀状遺構とは結びつかず、古墳に伴なわない感じもしますが、断面観察の結果明確な切り合いも見られることより墳丘基底部外側に特別な施設を設けているようにもされます。しかしこのトレンチだけでは確証できません。
- 第5グリットにおいて焼土塙が2ヶ所で検出されました。1つは長さ1.2m、幅0.4mの長楕円形で2段目テラスの外端から斜面にかけてのもので底に炭の屑が若干残っていました。壁は焼けていず、それほど強い火力とは考えられません。斜面の葺石は崩落しているものの上層からの掘り方も検出されず、流出した土や小石、埴輪片が真上で堆積していました。この中から形象埴輪片や高杯脚部も出土しています。このようなことから後世の土塙とは考え難く、小石や葺石を葺く以前、段築成がほぼ完了した段階で行っていると考えられます。このような焼土塙がどのような意味をもつものなのか今では定かにしがたいですが、形象埴輪片、高杯などが集中することと関連させて、祭祀的な1要素として考えうるものかも知れません。



第33図 大石塚古墳 原墳丘測量図



第34図 想定復元平面図

2. 出土遺物

(1) 墳輪

調査により出土した埴輪類は概ね、円筒形埴輪、朝顔形埴輪、楕円形埴輪、形象埴輪に分けることができます。いずれも墳丘各段のテラスにおいて検出したもので、大小の破片となっていたものが大半です。以下、復元したものについて述べることにします。

円筒形埴輪（第36、37図 1、2、4、5、6）

6段5突帯を基本とするものです。ほぼ垂直に立ち上がる胴部よりわずかに外反する口縁を持ちます。特に5段目及び最上段の間隔が狭いことは、通常の円筒形埴輪と異なるところです。透孔には三角形(逆三角形)、鍵形の二種類が見られ、個体により一方に限定されます。穿孔方式には2、4、5段目各々に4孔あけるものと、さらに3段目にも2孔を有するものとがありますが、いずれの場合も一方の突帯に偏って穿たれています。突帯は概して突出度の高いものですが、個体内で若干の差異を有します。器面はハケメ調整を主として行い、個体間および同一個体内の各段においても差異が認められます。なおいずれにも黒斑を有し、赤色顔料の痕跡を残しています。

朝顔形埴輪（第36、37図 3、7）

3. 全形を知り得たのはこの一例のみです。1、6と共にセットをなし、西側くびれ部でもひときわ目立つ位置に存在していました。残存高117.0cm、底径44.8cm、肩部径53.4cmを計ります。底部より肩部にかけて径を増して広がり、肩部ではやや丸みを帯びます。透孔は三角形で、2・4段目および肩部に各々4孔をあけます。端面に凹みを有し、鋭い稜をなす幅広い突帯がやや下がりぎみにつき、付設前に径7mmの円形刺突を行っています。また最下段に幅13cmにおよぶ粘土紐の接ぎ目が認められ、底部のみに幅広い粘土紐を使用したことがわかります。なお、3段目下半に線刻画が描かれていますが、何を表現するものか判断しがたいです。器面には黒斑を有し、赤色顔料の痕跡が見られます。

7. 後円部東側2段目テラスより検出したもので、楕円形埴輪とセットをなします。3段目までを残し、上部の形態はわかりませんが、3本セットの真ん中に位置すること、及び3と同様の底径を有することより朝顔形埴輪と考えられます。残存高43cm、底径47cmを計ります。透孔は三角形で突帯は幅広くシャープなつくりです。また突帯付設にはあらかじめ刺突を行っています。

楕円形埴輪（第37図 8、9）

8・9. いずれも最下段の破片のみを残存し、全周するものではありません。そのため正確な大きさは計りえませんが、掘方の規模等を参考にしますと、いずれもほぼ長径54.0cm、短径30.0cmを計るものと推定されます。突帯は8のみに残存し、幅の狭いものがかなり下向きにつけられています。端面の凹みもなく平坦で、他の円筒形埴輪のものとは、かなり形状を異にしています。

形象埴輪（第35図 1～4）

すべて東側くびれ部より検出しました。1、3、4はいずれも2段目テラスの焼土塙上面ならびにその付近より出土したものです。破片のみに限られ、全形のわかるものはありませんでした。

1. 幅3.3cmの広い突帯を有するもので、家形埴輪の棟木にあたる部分と思われます。突帯左右が1.3cmの厚さで、やや弯曲しながらのび、その表面に3本の刻線が見られます。

2. 1と同様、家形埴輪の棟木にあたる部分と思われます。幅4.6cmの突帯を有し短辺側の一方がやや傾きを変えて稜をなしています。

3. 盾形埴輪の破片で、盾本体と円筒部の接合部にあたります。表面には鋸歯文の一部および梯子状の線刻を有します。本体・円筒部はともに約1cmの厚さをもち、その間に接合粘土を充填させています。

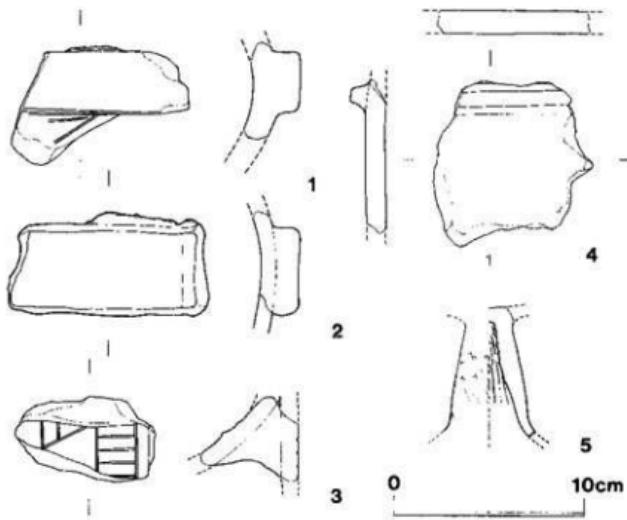
4. 厚さ約1cmの器壁に断面台形の突帯を付設しており、いずれの方向をとっても平坦面をなしています。このため通常の円筒形埴輪とは考え難く、家形埴輪の一部、あるいは楕円形埴輪の直線部分かとも考えられます。

(2) 土 師 器

東側くびれ部の2段目テラスより2点出土しました。うち1点は、第5グリッド南西コーナー付近の埋土中より、他の1点は、前述の形象埴輪と共に焼土塙直上より検出したもので、いずれも高杯です。

高杯脚部（第35図 5）

5. 脚柱部のみ残存します。残存高6.6cm、脚柱最大幅4.2cmを計り、やや中ぶくれの脚柱が裾部で急に外へ開く形態をもつと考えられます。外面には細かいヘラミガキが施され、裾部との屈折部をさらに横にナデています。内部は下半部をナデにより調整しますが、しづり痕を顯著に残しています。精製された胎上が用いられ、淡黄褐色を呈し、焼成も良好です。小若江式に併行するものと考えられます。



第35図 第5グリッド 出土遺物実測図

(3) 遺物のまとめ

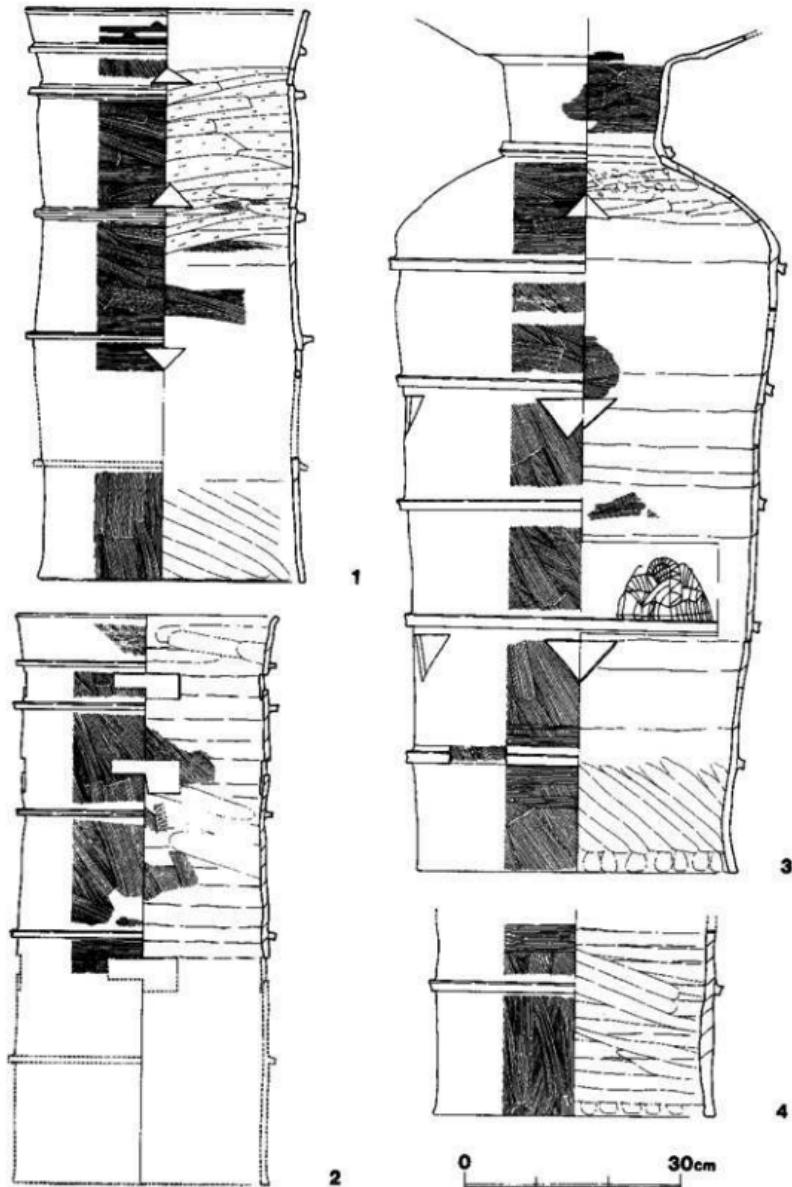
調査により出土した遺物は、以上のごとく埴輪類と土師器に限られました。

まず形態上の特色についてみますと 1. 円筒形埴輪の口縁部形態（5段目および最上段）が通例の円筒形埴輪のそれと異なること 2. 朝顔形埴輪の肩部に丸みを帯び、やや初現的な様相をうかがわせること 3. 楕円形埴輪を含むこと 4. 透孔には三角形、錐形の2種類があり、各段の孔数は4孔ないし2孔であること、等です。

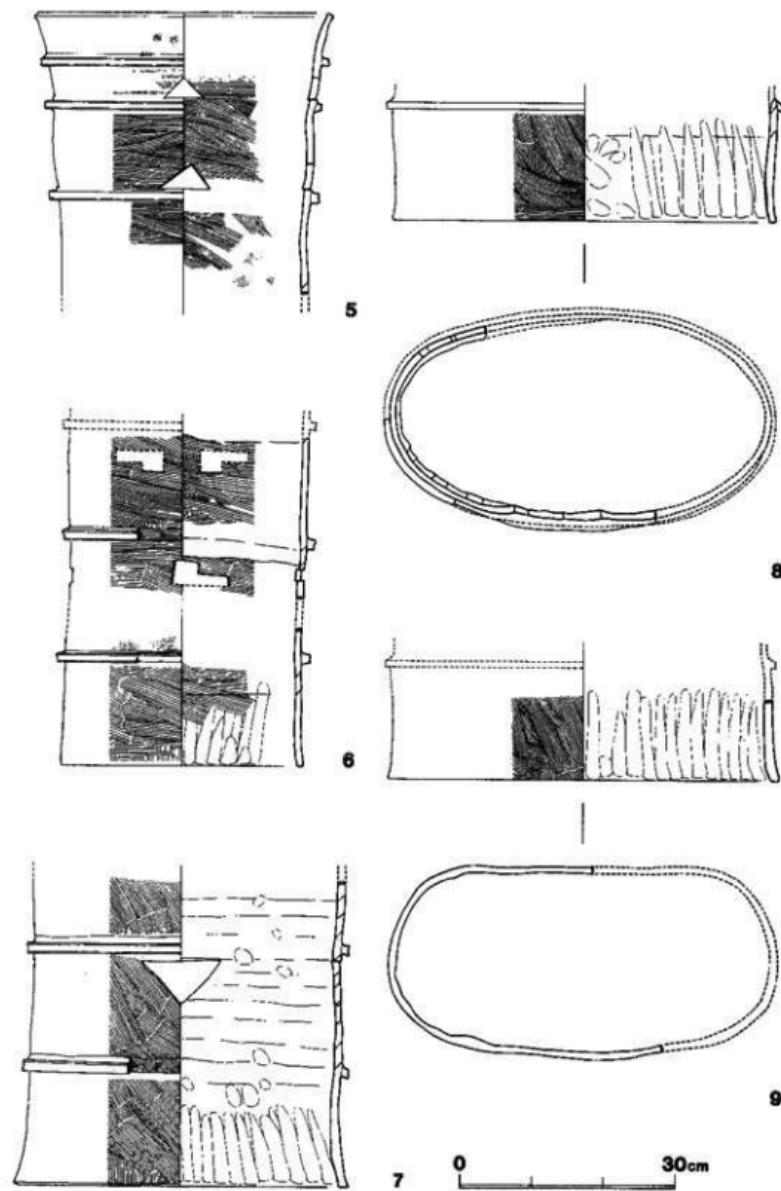
また製作技法の上からながめますと、すべて幅3～4cmの粘土紐の積み上げによることが知られ、乾燥単位面を明瞭に読みとることのできるものが存在します。このことは、他のもので各段ごとに中ぶくれの形状をなすことや、歪みを生じていることからも、1段を1乾燥単位として成形していった可能性を示唆するものと思われます。

突帯には概ね2種類が認められました。ひとつは幅が狭く突出度の高いもので水平につき、いま一つは幅が広く、やや下がりぎみにつくものです。その付設に際しては円形刺突ならびに凹線の2つの技法が見られます。焼成はほとんどの個体に黒斑を有するところより、野焼きによるものと思われます。また器面の各所に赤色顔料の痕跡を残すものが多く、全面に塗布されていた可能性が高いです。

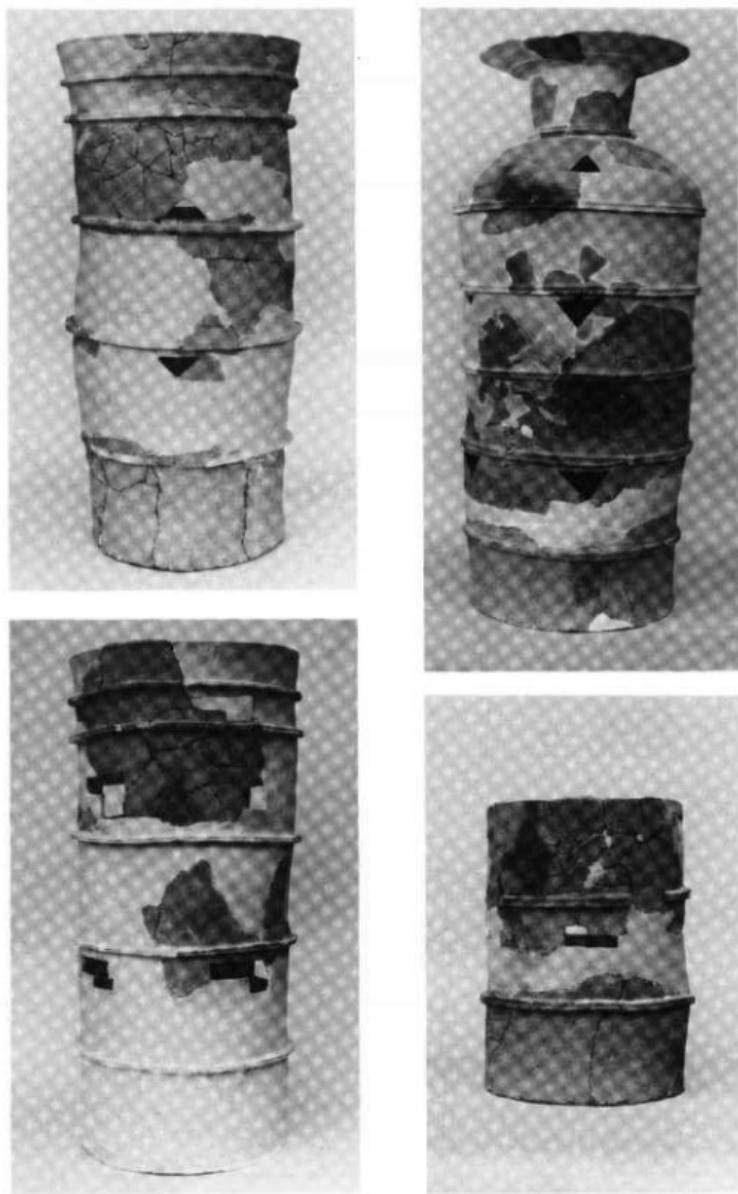
以上のような特色を有することが明らかになりました。



第36図 大石塚古墳出土埴輪実測図



第37図 大石塚古墳出土埴輪実測図



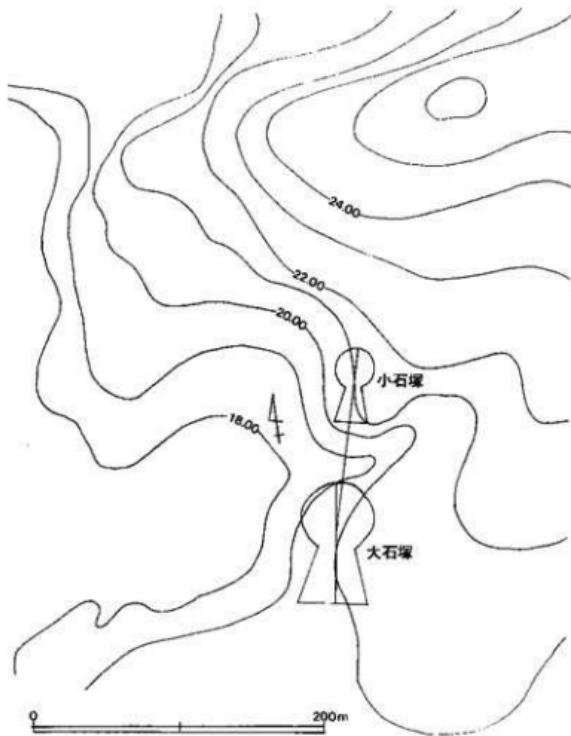
第38図 大石塚古墳出土埴輪

(3) まとめ

(1) 選地について

選地の条件として、まず両古墳が立地する地形をみてみると、両方に張り出した丘陵と南西方向に張り出す丘陵のネックに両古墳が狭い谷地形を挟んで、それぞれ立地しています。最高所は標高約26mで、最高所より南側に下った標高20m～21mの間で、やや平坦面を呈する地形上に位置します。特に大石塚古墳においては、その傾向が強く台地上地形を呈しています。西方の低地は標高約7m～8mで比高差約13mほどです。立地条件としては最適地とはいがたい所です。というのは、他の前期古墳の立地が通常、平野を見おろす高所に立地するのに、やや奥まった所に位置し、また付近でも南方の平野部に近い丘陵が眺望も良好です。しかし、その丘陵には同時期と思われる集落、原田遺跡などがあり、そのようなことも考慮して現在の所に選地したことにも十分考えられます。

しかしながら、このように考えられることは現在の地形から想定し得たもので、古代においては我々が考えるほど眺望は悪くなく、十分平野部からその莊厳な姿を仰ぎみることができたかもしれません。小石塚古墳の選地についても大石塚古墳を意識しており、主軸をそろえるように努めています。したがって約3度ぐらいたずれしかありません。



第39図 旧地形想定復元図

(2) 墳丘築造について

築造に際して、旧地形をどのように利用し、またどのように盛土を行なったかは築造過程における関心の1つであります。今回の調査の性格上、墳丘の観察は最小限にとどめ、小石塚古墳のみ一部断面観察を行ないました。大石塚古墳においては葺石埴輪等の外部施設保存のために墳丘内の観察は行ないませんでした。

小石塚古墳においては調査の結果、地山を削り出して墳形を整えていることがわかりましたが、その結果東側だけに壠状の遺構が残り、西側と前方部ではないという特異なものです。このことは旧地形を最大限利用し、また労働量を最小限にとどめようとした結果と考えられます。そこで、このような特異な壠状遺構をもつ結果について考えてみると、築造過程において地山が墳丘基底面より1段目斜面の途中まで墳丘面として利用されています。したがって、この地点で地山を整地し墳丘基底面を削り出して墳形を整え、基底面を意識的に同一レベルに仕上げています。このことより基底面の基準を旧地形の一番低い所の前方部に設けた場合、北東方向の地形的に高い部分だけを特に多く削らなければならなかった結果、また古墳を明確に区別するために行なわれたもので、掘削的な性格のものであると考えられます。

単位 m	後円部			くびれ部		前方部		
	1トレンチ	3トレンチ	5トレンチ 西側	6グリッド	7トレンチ	10グリッド	12グリッド	11トレンチ
地山高	20.8	21.1	20.7	20.4	20.6	20.1	20.1	20.1
基底高	20	20	19.75	19.8	19.9	20	20	20

大石塚古墳においても東高西低という地形的な制約によって、墳丘築成に影響をあたえています。今その数値を示してみると、後円部においては東側で基底面19.3m 1段目斜面長約1m、1段目テラス面19.75mで高低差0.6m、2段目斜面長約3.5m、2段目テラス面21.5mで高低差1m、西側では基底面18m、1段目斜面長約3m、1段目テラス面19.2m、2段目斜面長約3.2m、2段目テラス面20.5mです。基底面の高低差約1.3mを除々にではありますがなくそうとし、また盛土の流失、墳形のバランスなどを考え、西側の斜面が長めに、墳頂平坦面が東側よりになだらかだと考えられます。前方部において、東側では基底面と1段目斜面は検出できませんでしたが、後円部側とくびれ部で検出した高さに差が少ないので、前方部においてもほぼ同じ高さと思われます。このことより推定しますと、基底面19.3m、1段目斜面長約1m、1段目テラス面19.9m、2段目斜面長約2.4m、2段目テラス面20.9mで墳頂平坦面21.3mです。西側においては基底面18.55m、1段目斜面長1.4m、1段目テラス面19.3m、2段目斜面長1.2m、2段目テラス面20.2m、3段目斜面長2.7m、墳頂平坦面21.3mです。東側と西側では基底面の高低差約0.7m～0.8mで東側の基底面と西側1段目テラスの高さが

ほぼ同じぐらいになり、同じような比率の高低差で2段目テラスまで進み、その高低差が3段目にいたって墳頂を水平にするという意識から極端に違っています。このことは西側くびれ部で2段目テラスが前方部に移行する際に段差をもって接続することと無関係ではなく、すべて墳形のバランスを考えて行なったものと思われます。また西側からみて均整のとれた築成にすることと関連して両方の平野部からの眺望を意識した上でのことと考えられます。地山面の利用は、東側で1段目テラス付近まで、西側においては基底面のみであり、旧地形から想定しますに墳丘の者は盛土によったものと考えられます。

単位 m		基底面	1段目 斜面	1段目 テラス	2段目 斜面	2段目 テラス	3段目 斜面	墳頂平坦 (残存高所)
後 円 部	東 側	19.3	1	19.75	3.5	21.5	9	23.9
	西 側	18.0	3	19.2	3.2	20.5	15	23.9
く び れ 部	東 側	19.3	1	19.9	4.2	21.4		21.5
	西 側	18.7	2	19.5	6	21.4		21.5
前 方 部	東 側	19.3	1	19.9	2.4	20.9		21.3
	西 側	18.55	1.5	19.3	1.2	20.2	2.7	21.3

(3) 築造年代について

両古墳の築造年代について、若干ふれたいと思います。年代を決める手段として、すべてのことを総合して判断することが望ましいことは今さら述べることでもあります。しかし、今回の調査の性格上、規模、墳形、段築成、外部施設（壙、葺石、埴輪）、に重点を置いたため、総合的な判断に欠けます。それでも小石塚古墳においては削平されているものの粘土構を検出し、大石塚古墳においては河原石の葺石のかわりに板石を用いるという箇所もあり、その板石が裏六甲から三田方面に産するものを用いているということになれば前述したように、竪穴式石室の可能性が強いです。このように内部構造の一端もうかがうことができます。墳形は両古墳とも前方部があまり開かない、そして後円部の高さに比べて前方部が低いという、いわゆる古式の古墳の範疇に入るものです。このようなことから凡その時期は察せられるものであります。近年埴輪の研究も進み細分された編年案も示されるようになり、また幸いにも小石塚・大石塚両古墳とも時期を限定しやすい埴輪や土器が出土しています。

小石塚古墳においては埴輪の数は多くなく、ほとんど破片で風化が激しく全体を復元しえるものはありませんが、その中でも朝顔形埴輪片、壺形土器から考えてみると埴輪は全体的に薄手で、突帯もシャープなものが多く、透孔も突帯に近く三角形か逆三角形（第19図19番）、円か半円（第19図16番）です。朝顔形埴輪は胴が張る古相

のもので、口縁部が通常の朝顔形埴輪より外反度がきつく、口縁端部は下方にやや拡張した垂れ下がりの特徴をもちます。調整はわりと細かいハケメで、タテ、ナナメ、ヨコ、いずれもあり、そのうちタテハケのみで突帯が台形に近いや新しい様相を示すものもあります。以上のようなことから、川西編年のⅡ期にはほぼ相当するものと考えられます。そこで壺形土器についてみると胸部最大径を中位よりやや上方に有し、肩部が張り底部にいくにしたがってすぼまるプロポーションを呈しています。調整は外面上半を主にハケメで下半をヘラミガキし、内面は整形時の指頭をヘラケズリによって消すものがほとんどです。底部は遺物のところで述べているように最初からつくることを意図しなかったもので、底部外端をやや肥厚氣味にさせ終わります。この段階のものはほとんど円筒形埴輪を伴ない、埴輪と同じ様にして用いられています。

このような壺形埴輪と呼ばれるものが朝顔形埴輪と共に、どのように配置されたか興味深いことですが、すべて崩落した状態であり不明です。しかし後円部墳頂に囲繞する可能性が強く、出土遺物のうち円筒形埴輪の口縁が1点もないことなどから、直接埋めて立て並べたものと思われます。

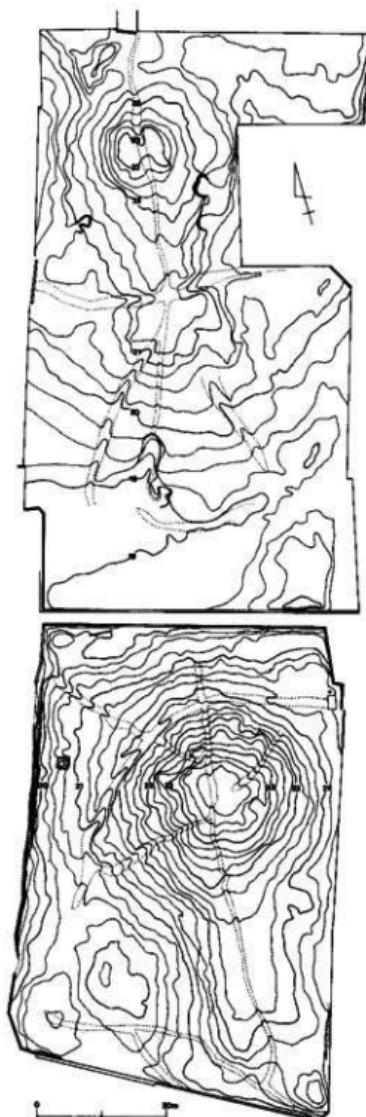
大石塚古墳においては全体を復元できた埴輪があり、小石塚に比べて良好です。朝顔形埴輪は通常のものより大形で、肩の張りに比べて上方がやや低くなっているが初現的な様相をとどめ、また透孔も三角形で突帯に近く肩部にも穿孔するという特異なものです。肩部に穿孔する例は布留遺跡出土の勾玉形のものがよく知られます。円筒形埴輪においては最上段の突帯の間隔が狭いと言う特異なものです。透孔は円形のものではなく三角形、逆三角形、鍵形と古い様相を示します。調整にも内面ヘラケズリするものがあります。また注目される埴輪類の中に橢円形埴輪があります。

以上のようなことから大石塚古墳の築造年代について考えてみると、埴輪は、川西編年のⅠ期からⅡ期にかけての特徴を多く有します。土師器は、他の古墳出土のものと比べても型式差は認められなく、かえって古い様相を示している感じさえします。しかし埴輪の外面調整において、初期のものがタテハケのみではなく、ヨコハケも混じり多様化であるということに反して、大石塚古墳のものにおいて画一化の兆しがみえ、若干遅れる要素が強いようです。このようなことを考慮してみると、現在の考古学の相対年代観から四世紀末葉に両古墳が相前後して築造されたと推定されます。

以上の結果、従来より言われていた桜塚古墳群の時期よりも逆上ることが明らかになりました。西摂北東部の前期古墳と比べてもそれほど時期差は考えられなく、古代の豊島、また西摂の古代史を考えるうえで貴重な古墳群です。

註1 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻2号 1978年)

第40図 墓丘測量図



V. 整 備

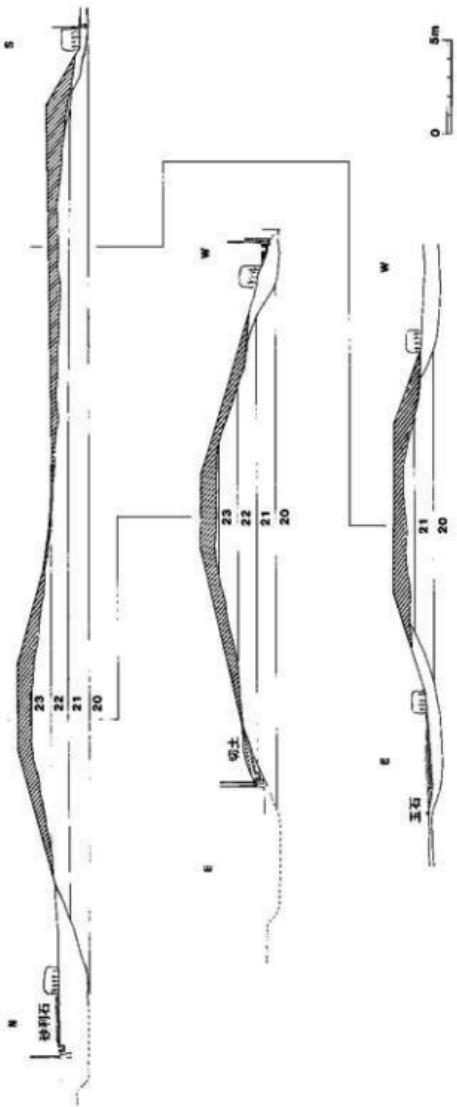
(1) 小石塚古墳

調査の結果、原形がかなり損なわれていることが判明しました。この状態で公開しても、前方後円墳というものを視覚的に理解することは困難であると思われることより、できるだけ原形に近い形に復元する方針で計画しました。しかし古墳内に多くの樹林があり、また、この地域が風致地区ということもあって、樹林もできるだけ保存し、目にあまる雑木だけを排除しました。したがって、古墳の原基底面（地表下約1m）まで出さず、地表面以上の崩壊した墳丘を盛土して復元する方針で行いました。このようなことから実際の高さより低く感じられることと思われます。原形は後円部が二段に築成されていますが、復元する場合、現地表面から復元しますと、約0.5~1m上った所で中段テラス面となるため、立体的に異和感が生じることになり、あえて段は設けず復元しました。墳丘は盛土を約268.04m³行い、デコンドラを吹きつけ、流失を防ぐようにしました。古墳の輪郭を明示するために生垣状の植栽を行い、東側の堀の明示には外側に玉石を貼り、中に砂利石を入れて明示しました。その他、雨水の処理のため、敷地内の隅に排水施設を設けました。



第41図 復元後的小石塚古墳（正面から）

第42図 塗丘盛土断面図



(2) 大石塚古墳

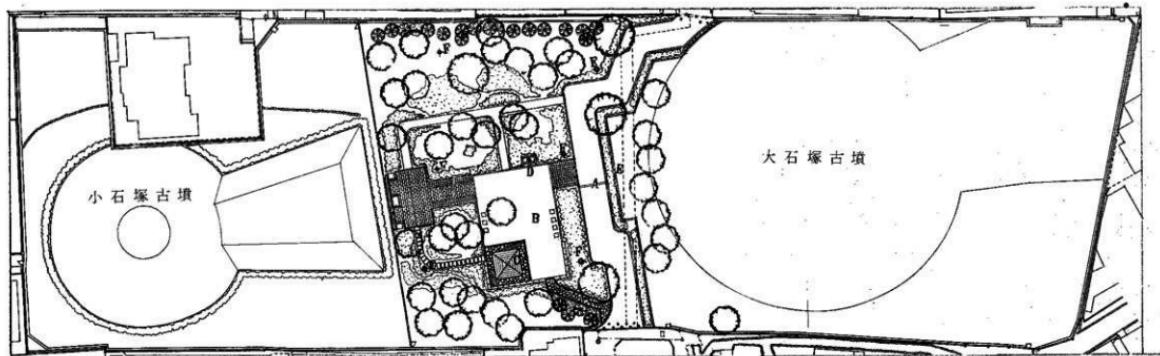
調査の結果、墳丘盛土の流失は進んでいるものの、それほどひどくなく、比較的良好な状態でしたので、墳丘は手を加えず現状保存する方針で、外柵を排水溝のみ設ける方針で行いました。

(3) 開放区域（公園部分）

当区域は北の小石塚古墳、南の大石塚古墳との中間の空地およそ2000m²を、史跡にふさわしい利用区域として公園化し、市民の憩いのスペースにしようとするものです。古くから大石塚古墳北側には東西にむかう歩道があり、阪急電車岡町駅に至る連絡路として利用されていましたので、当整備事業においても歩道を主園路としてその周辺広場を公園化するよう計画しました。当域においては基本方針通り、造成は盛土を原則とし、現存樹木の保存を行い、周囲の環境との調和、史跡にふさわしい開放利用を考慮して設計、施工が行われました。公園内は南北に位置する各古墳をのぞみながら遊歩できる林内園路、四阿、置石ベンチ等の休養施設、説明板等が設けられて、休養と学習の機能を果しております。

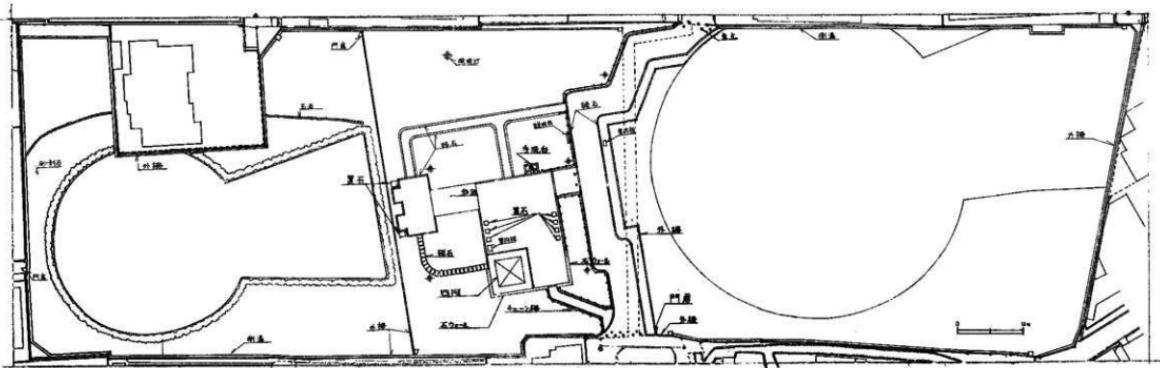


第43図 大石塚古墳外柵



凡 例 A 主園路 B 広 場 C 四 阿 D 手洗台 E 外 櫈 F 照明灯

第44図 計画平面図



第45図 施設配置図



第46図 整備後の開放区域

VII. あとがき

本書は、さきに刊行した「史跡大石塚・小石塚古墳—保存事業に伴う調査報告一」(1980年)の一部内容に、その後の保存工事等の成果を加えて作成しました。なお、古墳調査の詳細については、上記報告書をご高覧いただければ幸いでございます。

当整備事業は昭和54・55・56年度にわたり、国及び大阪府の補助を受けて実施されたもので、ご指導とご支援をいただいた文化庁並びに大阪府教育委員会に対し、深く感謝申し上げます。

当整備事業の設計・施工について豊中市土木部公園緑地課の協力を得ました。

当整備事業の完了にあたって、現代に生きる私達が先人の文化遺産を未来に継承していくことの大切さについて理解が深まり、文化財保護の意義がますます認識されることを願ってやみません。事業の早期実現にご協力いただいた地元の皆様並びに関係各位に厚く御礼申し上げます。

史跡大石塚・小石塚古墳
—環境整備事業報告—

1982年3月

発行 豊中市教育委員会

豊中市中桜塚3丁目1-1

編集 社会教育課文化係

印刷 西村印刷株式会社